

# 視覚障害者と自転車の歩道通行に関する研究

元田 良孝<sup>1</sup>・宇佐美 誠史<sup>2</sup>

<sup>1</sup>フェロー会員 岩手県立大学名誉教授

(〒020-0693 岩手県滝沢市菓子152-52)

E-mail:motoda@iwate-pu.ac.jp

<sup>2</sup>正会員 岩手県立大学講師 総合政策学部総合政策学科 (〒020-0693 岩手県滝沢市菓子152-52)

E-mail:s-usami@iwate-pu.ac.jp

日本では自転車は車道という原則にもかかわらず、自転車が歩道を通行することが日常的になっている。自転車には歩行者保護のため歩道上で中央より車道寄りの走行、徐行、歩行者の通行を妨げるときは停止などの原則があるが、殆ど守られていない。このため歩行者と自転車との錯綜が生じ、特に交通弱者である身体障害者や高齢者とのトラブルも多い。ここでは身体障害者として視覚障害者を対象として、歩道上の自転車と視覚障害者に関する研究論文のレビューを行い、さらに文京区内在住の視覚障害者にアリング調査を行った。この結果、多くの視覚障害者は歩道上の走行する自転車に脅威を抱いており、現行の自転車歩道通行可のルールの問題点が確認された。今後調査対象者を増やしてさらに問題点を探求してゆく予定である。

**Key Words :** *Bicycle, Blind, Traffic safety, Sidewalk*

## 1. はじめに

我が国の自転車通行は法的には車道通行が原則で歩道通行は例外であるにもかかわらず、実態は歩道通行が原則となっており、大半の自転車は歩道を通行する。この現象は世界的に見ても稀有であるが、歩道通行に起因する様々な問題も生じている。

最も大きな問題は歩行者の保護ができないことである。道路交通法では歩道上の通行ルールについて、第63条の4第2項に中央より車道側の通行、徐行、歩行者優先の3つのルールがあり歩行者保護を明記している。しかし自転車本来の性能を發揮させようとするれば法律は守ることが難しく、全くと言っていいほどこの法律を守る人はいない。このため自転車を避けられない高齢者や障害者は自転車の通行を怖がっていることが明らかになっている。

自転車の歩道通行は自転車の安全性から議論されることが多いが、歩行者の保護の視点から語られることは少ない。ここでは歩道上の交通弱者である視覚障害者を対象に、歩道通行の自転車との関係について分析を行い、歩道のあるべき姿についての基礎資料を提供するものである。今回は既往研究のレビューと、視覚障害者へのヒアリングについて報告する。

## 2. 先行研究

高山ら<sup>2)</sup>は白杖によって単独歩行が可能な視覚障害者62名を対象にインタビュー形式で歩行時の道路環境についてアンケート調査を行った。道路で危険を感じる者は、いつも感じるが79%、時々感じるが15%で9割以上の者が危険を感じていた。危険を感じる対象は放置自転車等の歩道上の放置物が83%、次いで歩道上を走っている自転車が73%、駐車中の自動車が65%であった。上位が自転車関連であるのが注目される。

徳田ら<sup>3)</sup>は1999年に国際交通安全学会で「視覚障害者の歩行者としての交通安全ニーズに関する調査研究」を発表した。本研究で対象としたのは全国の単独歩行をしている全盲者343名、弱視者459名計802名の大規模なものであり、全盲者、弱視者別に交通安全に関するアンケート調査を行った。質問は様々な項目にわたるが、自転車関係では次のことが明らかになっている。全盲者では歩行時に自転車にぶつけられたことのある者は全体の67%と多く、その時自転車側で謝るのは48%と半数以下である。自転車が歩道を走っていることに対して危険を感じるかという質問については、非常に感じると答えた者が60%、やや感じると答えた者が31%で、合わせると約9割の者が危険を感じていた。弱視者では自転車にぶつけられたことのある者は50%で、全盲者と比

較するとやや少ないものの高レベルである。自転車が歩道を走っていることに対し危険を感じるかという質問には、非常に感じるが 45%、やや感じるが 33%の合計 78%で、全盲者よりやや少ないがそれでも約 8 割の人が危険を感じていることになる。

鹿島ら<sup>4)</sup>は視覚障害者と健常者に様々な環境音を聞かせ、認知状況を比較した。視覚障害者は自転車の走行音を認知する傾向が強いが、健常者は単に雑踏中に音が存在すると看做す傾向が強く、音の種類に対する意識は弱いとし、視覚障害者は危険回避のため自転車の音に注意を払っていると推測している。

福原ら<sup>5)</sup>は放置自転車と視覚障害者の歩行の安全性について徳島市内在住の視覚障害者 16 人にヒアリング調査を行った。駅前歩行時の問題点で最も多いのが接触（人・モノ）で 7 名、次が放置自転車 5 名であった。この研究では放置自転車に主眼が置かれているため、走行中の自転車については触れられていない。

石川<sup>6)</sup>は道路交通法と視覚障害者の歩行行動の関係を調査した。6 校の視覚支援特別学校高等部生 98 名のアンケート調査を行った結果、自転車に関し歩道上の 3 ルール（中央より車道寄りを通行、徐行、歩行者優先）が守られていないとした者は 86%と大半であった。ただし自転車の危険な運転で怪我した者は 17%と多くなかった。

このように視覚障害者は歩道上で日常的に自転車に接触しており、多くの者が危険を感じていることが報告されている。しかし自転車の歩道上の安全性の研究に比べ歩行者保護、特に視覚障害者に関する研究は少ない。また過去に徳田らの大規模調査(1999 年)があるものの、最近の研究は少なく、当時より自転車の利用状況が変化していると考えられるため、現時点での解明を進める必要がある。

### 3. ヒアリングによる実態調査

問題点の所存を明らかにするため、視覚障害者に 2016 年 7 月 11 日にヒアリング調査を行った。調査項目は属性の他自転車に関し、

- ・歩道上を走る自転車
  - ・危険な経験の有無とその時の対応（相手の対応含む）
  - ・白杖の被害の有無
  - ・自転車を避けるための工夫
  - ・ベル使用の是非
  - ・望むこと
  - ・その他の交通障害について
- 等であった。

ヒアリング対象者は表-1 に示す文京区視覚しょうが

表-1 ヒアリング対象者

	年代	性別	職業	視覚	障害発生時
A	50 代	男性	自営業	全盲	20 代
B	50 代	男性	会社員	全盲	13 歳
C	50 代	女性	無職	全盲	18 歳

い者協会の 3 名である。3 名とも現在はヘルパー同行で外出することが多いが、A 氏、B 氏は単独で外出することもある。C 氏は単独外出はないが過去には単独で外出した経験を持つ。

#### (1) 歩道上を走る自転車

歩道を走る自転車について、肯定的な意見は聞かれない。許せないという強い意見もあった。最近では走行音が小さくなり、認知しにくい状況であるという。ベルトドライブの自転車が増えたことが原因という指摘もあった。スポークに付けて走行音を発生する装置があるという紹介もあった。

マナーがよい自転車は、運転技術がよい人、「通りますよ」と声をかけてくれる人である。逆にマナーがよくない自転車は運転技術の低い高齢者や、狭い間をすり抜けて通る自転車である。

#### (2) 危険な経験の有無とその時の対応

自転車にぶつけられた経験を聞いた。ぶつけられるのは日常茶飯事である。腕にぶつかることが多く、頻繁にかすられる。衝撃でサングラスを飛ばされたこともある。白杖を持っているのにぶつけられて怒鳴られることがある。罵声を浴びせられたり、舌打ちをされたり、視覚障害者なのに「どこ見て歩いているんだ」と言われることがある。

ヘルパー同伴の時でもぶつけられることがある。自転車は軽車両なのに運転者は危険性を理解していない。点字ブロック上を歩いてもぶつけられる。ただぶつけられて転倒したり怪我をした経験は 3 者ともなかった。

#### (3) 白杖の被害

視覚障害者は通常白杖を持って歩くが、自転車に白杖を損傷させられるケースについて聞いた。3 名とも白杖を自転車によって損傷させられた経験があった。白杖は自転車のスポークに巻き込まれることで損傷する。白杖は金属製、グラスファイバー製、木製があり、自転車との接触により金属製は曲がり、他のものは折損する。単独歩行の場合白杖がないと家にも帰れなくなるので困る。事故時に 3 者とも謝られたことはなく逃げられたが、他の人では弁償してもらったケースもある。

警官の前で自転車により白杖が損傷し、警官が呼び止

めたにもかかわらず逃げられたケースもある。白杖には区の補助金があるが、自転車事故での損傷には補助金は下りず、自己負担である。損傷した場合を考え、予備の白杖を用意している。白杖の事故については毎日新聞の記事<sup>7)</sup>によると自転車が原因と思われる修理に出される白杖の件数は増加しているとしている。

#### (4) 自転車を避けるための工夫

歩道通行時に自転車を避けるためどのような工夫をしているかを聞いた。

音がしたときは身構えるが、大きな通りでは自動車の走行音が大きく、わからないことが多い。道の端を歩くようにしているが、それでも建物との狭い隙間を通り抜ける自転車がある。夜間目立つように反射材を付けている。傘は夜目立つように明るい色を選んでる。自転車には乗らないが事故で保険金の下りる自転車保険に入っている。

#### (5) 自転車のベルについて

自転車のベルは法律で定められた場合を除き禁止されているが、自己の進路を確保するために使用する者が後を絶たない。自転車の歩道上でのベルについては、遠くから自転車の存在を知らせるベルはよいが、直前で鳴らされると「どけ」という意味になるので好ましくないとの回答があった。ベルは視覚障害者にとって自転車の存在を知らせる役目もあるため法律では規制されているが使い方により有効と考えられている。

#### (6) 自転車に望むこと

自転車と歩行者を分離してほしいとの意見が多かった。自転車を車道へ移すと危険なので、自転車道等の専用空間が望まれている。ただ自転車道は縁石を用いるので誤って入った場合障害となって危険とする者もいた。

## 4. おわりに

視覚障害者にとって歩道上を走る自転車は歩行の大

きな障害であることが改めて確認された。怪我をするほどの大きな事故は聞かれなかったが、視覚障害者の歩行にとって重要な白杖が自転車により被害を受けていることが明らかとなった。白杖の被害は歩行者との衝突では生じないもので、スポークに巻き込まれる自転車特有の被害形態と考えられる。今後アンケート調査などでさらに多くの視覚障害者の意見を聴取し、歩道を走行する自転車の問題を明らかにしてゆきたい。

#### 謝辞：

多忙の中、ヒアリングに応じていただいた文京区視覚しょうがい者協会の皆様、ガイドヘルパーの方々に感謝します。

#### 参考文献

- 1) 村上ひとみ、月川雅洋、喜多村俊朗：高齢者の自転車ヒヤリ・ハット調査と自転車走行空間に関する研究—山口県宇部市の事例—、第 47 回土木計画学研究・講演集、CD-ROM、2013 年 6 月
- 2) 高山佳子、大野久奈：視覚障害者の道路環境に関する実態、横浜国立大学教育紀要第 32 集、pp.189-200、1992 年 10 月
- 3) 徳田克己他：視覚障害者の歩行者としての交通安全ニーズに関する調査研究報告書、国際交通安全学会、1999 年 4 月
- 4) 鹿島教昭、田村明弘、太田篤史、鈴木和子、小澤繁之：視覚障害者と健常者の環境音認知の比較、横浜市環境科学研究所報第 26 号、pp.68-78、2002 年
- 5) 福原幸、近藤光男、有本浩太郎、渡辺公次郎：放置自転車が視覚障害者の歩行の安全性に及ぼす影響に関する研究、福祉のまちづくり研究、第 7 巻第 1 号、pp.20-28、2005 年 1 月
- 6) 石川裕大：道路交通法を基にした視覚障害者の道路通行に関する研究、平成 26 年度学位論文、兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 特別支援教育専攻 障害科学コース、2015 年
- 7) <白杖>視覚障害者の「目」、折損増加 自転車が接触、修理の 6 割超、毎日新聞、2011 年 8 月 16 日

(2016. 7. 29 受付)

## **A STUDY ON BLINDS AND BICYCLES RUNNING ON SIDEWALK**

Yoshitaka MOTODA, Seiji USAMI

In Japan, bicycles usually run on sidewalk. However, this custom makes a lot of problems between pedestrians and bicycles. Especially blind people is afraid of bicycles. In this study, literature review and interview of blinds were done. The results showed that blinds suffered a lot of problems from bicycles running on sidewalk. They indicate the necessity of changing present rule and regulations which allow bicycles running on sidewalk.